

研究報告

看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化 — チャレンジサイト活動による高齢者とのふれあい交流から —

森 幸弘¹⁾、福田峰子¹⁾、松田武美²⁾

¹⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科、²⁾日本福祉大学看護学部看護学科

要 旨

本学のチャレンジサイト・プロジェクトにおける高齢者とのふれあい交流前後での、看護学生のエイジズムの変化や、活動後の高齢者に対するイメージの変化を明らかにすることを目的に調査を行った。その結果、学生のエイジズムの変化は、日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版 3 因子のうち、誹謗因子得点が活動後有意に低下した ($p < 0.05$)。学生は、活動を通じて高齢者と関わる中で、会話の中から高齢者の生きてきた人生や価値観にふれ、高齢者を誹謗するような否定的な認知を弱める可能性が考えられた。また、学びの記述内容から、高齢者の【社会外向性の発見】、【朗らかさの発見】、【高齢者への接し方・対応・援助への理解】、【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】が抽出された。この結果から、高齢者との交流体験は、看護学生にとって高齢者の理解を深める上で貴重な体験に繋がっていた。さらに、エイジズムの一部を弱める効果もみられ、看護学生の高齢者との交流を推奨していく取り組みが重要と考える。

キーワード：看護学生、エイジズム、高齢者イメージ、高齢者とのふれあい交流

1. はじめに

我が国の 65 歳以上の高齢者人口は、平成 25 (2013) 年過去最高の 3190 万人となり、高齢化率は 25.1% に達した。今後高齢者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、平成 47 (2035) 年には 33.4% で 3 人に 1 人が高齢者となると予測されている¹⁾。

このような社会情勢の中、医療従事者の高齢者に対する専門的知識がより求められる時代となっている。その中で看護師の役割は重要となり、高齢者の保健医療サービスや看護ケアに対するニーズに応じた対応力が求められる。

そのため、看護学生に対する基礎教育の中で、高齢者を全人的に理解し、個人、家族、社会のニーズに応じるために必要な知識と技術を教示していかななくてはならない。ところが、核家族化が進み、高齢者との関わりが少ない現代の看護学生の多くは、高齢者に対し否定的なイメージを持つことから、健康な高齢者の状況や高齢者の個別性

や多様性を理解できる教育の必要性が以前より指摘されている²⁾。それらのイメージは看護をする上での基盤となり、看護の質・内容に影響を及ぼすと指摘されている³⁾。

高齢者に対する様々な形態の偏見・差別はエイジズムと呼ばれ、近年ではレイシズム (人種差別)、セクシズム (性差別) に続く第 3 のイズムとして注目されている。この概念は、1969 年の Butler の論文で初めて用いられた⁴⁾。エイジズムの関連要因を探った研究には、看護学生の高齢者イメージ、生活状況との関連を明らかにしたものや⁵⁾、看護学生の老人に対する認知と差別的な態度や感情を測定し、学生背景との関連を明らかにした研究⁶⁾などがあり、また看護学生の高齢者実習前後におけるエイジズムの変化を明らかにした報告がある⁷⁾。

看護学生が高齢者に対する正確な知識や理解をもち、高齢者の多様性や個別性に配慮した看護を展開できる基礎的能力を獲得するため、看護基

礎教育においては高齢者への偏見や差別というエイジズムを低減するためのさらなる課題を明らかにすることが必要である。しかし、その研究はまだ数少なく、今後さらに発展させていかなくてはならない。先行文献には、地域高齢者とのふれあいの場を通じ、看護学生のエイジズムがどう変化するかを調査した研究はみられない。

そこで本研究では、看護学生が本学のチャレンジサイト・プロジェクト（以下チャレンジサイト活動）における高齢者とのふれあい交流を通じて、高齢者に対するエイジズムやイメージがどう変化するかを検討し、エイジズムの意識を和らげるための教育的な示唆を得ることをねらいとした。

2. 研究目的

本学のチャレンジサイト・プロジェクト活動における高齢者とのふれあい交流での、看護学生のエイジズムの変化や、活動後の高齢者に対するイメージの変化を明らかにする。

3. 用語の定義

エイジズム：高齢者に対して抱く否定的な偏見、もしくは差別のことである。本研究では、エイジズムについて原田らの日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版⁸⁾を用いて、【嫌悪・差別】【回避】【誹謗】の3つの要素からとらえた。

4. 研究方法

1) 対象および調査時期

平成27年8月から平成28年1月までにチャレンジサイト活動に参加した本学学生1～3年生20名のうち研究協力の同意の得られた者とした。

2) 調査方法

チャレンジサイト活動説明会時に、研究の趣旨および倫理的配慮について記載した調査依頼文書、質問紙、回収用封筒を対象者へ配付した。調査はチャレンジサイト活動前後で行い、対象者の自由意志により無記名自記式質問紙に回答し、回

答後は個別の回収用封筒に入れて学習室に設置した回収箱に投函し、回収を行った。

3) 調査内容

(1) チャレンジサイト活動前後のエイジズム

原田らの日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版（以下FSA 短縮版）⁸⁾を用いた。FSAは「嫌悪・差別」、「回避」、「誹謗」の3因子14項目で構成され、信頼性・妥当性は、尺度開発者らによって1000名を超える青年に対して検証されている。

質問紙は、各項目について「そう思う」、「まあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の5つの選択肢から回答を得た。それぞれの選択肢は5点から1点を配点し単純加算して得点化し、点数が高いほどエイジズムが強いことを示すようにした。逆転項目は1点から5点に変換した。

(2) チャレンジサイト活動後に高齢者に対するイメージの変化（自由記載）

(3) チャレンジサイト活動を通じて学んだ点（自由記載）

(4) その他、学生の属性については、性別、年齢、学年、祖父母との同居経験、普段高齢者と交流する機会の有無、高齢者を対象としたボランティア活動経験、就業（アルバイト含む）経験とした。

4) 分析方法

(1) FSA 短縮版については、下位尺度別の得点を活動参加前後で対応のあるt検定を行った。

(2) 活動後の高齢者イメージの変化、活動を通じて学んだ点の自由記載の内容より抽出された記述（以下コード）を、内容の同質性、異質性に従いカテゴリー化した。分析は研究者間で繰り返し検討した。

5) 倫理的配慮

本研究への参加は対象者の自由意志により決定され、同意しない場合においても成績評価や卒業判定等への影響はなく、記載内容によって対象者の専門性や学習のレベルを個人的に評価することなどの不利益を被ることはないことを文書と口頭にて説明した。本

研究は本学倫理審査委員会から 2015 年 8 月に承認を受けた（承認番号 No. 270033）。

5. チャレンジサイト活動内容の概要

本活動は、単身や高齢者夫婦世帯の増加などから高齢者の孤立傾向の問題が指摘されている社会情勢の中、地域に在住している高齢者に対して、本学学生による高齢者との交流活動により、高齢者の孤立防止や仲間作りにつながる活動を主目的とし、「つなごう絆の輪！ー中部大生による高齢者らの仲間作り&ペンフレンド活動ー」というテーマで行った。

活動内容は、地域在住の高齢者の方々との交流会を通して、高齢者の方が日々の生活に楽しみが広がる機会となる活動を展開した。具体的には限界集落である中山間地域在住および春日井市内の高齢者に対して、本学学生とのペンフレンドによる交流希望の高齢者を募り、月に 2 回程度の文通を行った。さらに、施設で高齢者方とお菓子作りやカラオケ、健康体操などレクリエーションを一緒に行った。

6. 研究結果

平成 27 年 8 月から平成 28 年 1 月の期間にチャレンジサイト活動に参加した学生 20 名のうち、質問紙回収数は 9 名（回収率 45.0%）であった。回答者すべてに質問紙の記載漏れはなく、9 名（100%）を解析対象とした。

1) 学生の背景

学生の性別は、女性 7 名（78%）、男性 2 名（22 %）であった。学年は、1 年生 4 名（44%）、2 年生 1 名（12%）、3 年生 4 名（44%）であった。

祖父母との同居経験のある者は 5 名（56%）、ない者は 4 名（44%）で、普段高齢者と交流する機会がある者は 4 名（44%）、ない者は 5 名（56%）であった。

高齢者を対象としたボランティア活動経験がある者は 5 名（56%）、ない者は 4 名（44%）で、就業（アルバイト含む）経験のある者は 2 名（22%）、ない者は 7 名（78%）であった（表 1）。

表 1 対象者の背景

		n	%
性別	男性	2	22
	女性	7	78
学年	第1学年	4	44
	第2学年	1	12
	第3学年	4	44
祖父母との同居経験	なし	4	44
	あり	5	56
普段高齢者と交流する機会	なし	5	56
	あり	4	44
高齢者を対象としたボランティア活動経験	なし	4	44
	あり	5	56
就業(アルバイト含む)経験	なし	2	22
	あり	7	78
年齢(平均± SD)	18～21(19.5±1.1)		
		n=9	

2) チャレンジサイト活動前後のエイジズムの変化

チャレンジサイト活動前後のエイジズムの変化を活動前後で FSA 短縮版各因子の平均値を比較した。その結果、嫌悪・差別因子、回避因子では有意差はなかった。しかし、誹謗因子は、チャレンジサイト活動後に得点が有意に低くなった（ $p<0.05$ ）（表 2）。

表 2 チャレンジサイト活動前後のエイジズムの変化

FSA短縮版因子	前後	平均値±SD	p値
嫌悪・差別	活動前	8.2±2.9	n.s
	活動後	8.0±1.9	
回避	活動前	9.1±4.0	n.s
	活動後	6.7±1.8	
誹謗	活動前	10.0±2.3	<0.05
	活動後	6.8±1.2	
n=9			

3) 高齢者に対するイメージの変化

学生のチャレンジサイト活動後の高齢者に対するイメージの変化に関する記載内容を抽出し分類した。カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、< >をコード、「 」はデータとして以降に示す。

その結果、【社会外向性の発見】、【朗らかさの発見】の 2 カテゴリーが抽出された（表 3）。

【社会外向性の発見】には、《積極性への驚き

》、《社交性の発見》、の2つのサブカテゴリーが含まれていた。《積極性への驚き》の中には、「カラオケを楽しそうに歌っている高齢者の方を見て、高齢者は控えめで恥ずかしがりやなイメージを持っていたが、活動前よりも高齢者は積極的だと思った。」のように、活動前には高齢者に対する控えめなイメージから、活動後には積極性を感じたという内容に変化がみられた。

《社交性》の中には、「意外と人と話をするのが好きな高齢者が多いと思った。」のように、人と会話をすることが好きな高齢者が多いという発見をしたという記載内容がみられた。

【朗らかさの発見】は、《明るいイメージへの変化》、《温かさへの感動》の2つのサブカテゴリーから構成された。

《明るいイメージへの変化》の中には、「高齢者に対して元々肯定的なイメージを持っていたが、ふれあってみて明るい方が多く、いろいろ話してくれるため、より好きになった。」のように、活動で高齢者とのふれあいを通じて、より高齢者の明るさを感じ、好意的なイメージをもったといった内容であった。

《温かさへの感動》の中には、「活動後はいつも大きな拍手をくれたり、笑顔で“ありがとう”と言ってくれたり、感謝の気持ちを大切にしていることが分かった。」のように、活動後に高齢者から受けた感謝の言葉から、高齢者の温かさを感じた内容があった。

4) チャレンジサイト活動を通じて学んだ内容

チャレンジサイト活動による高齢者との交流を通して学んだ内容は、【高齢者への接し方・対応・援助への理解】、【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】の2カテゴリーが抽出された(表3)。

【高齢者への接し方・対応・援助への理解】を学んだ記載が最も多く、《コミュニケーション技術の重要性》、《高齢者の心身の特徴理解》、《高齢者の生きがいづくり》、《社会性の維持》の4つのサブカテゴリーから構成された。

《コミュニケーション技術の重要性》では、「高齢者とお話をする際は、視線を合わせて話をしたり、話すスピードや声の大きさに配慮しなければならないと学んだ。」や、「最初は話す内容に迷っていたが、まずは挨拶から始めることが大切だと分かった。」といったように、高齢者と話をする際の配慮についての記述があった。

《高齢者の心身の特徴理解》では、「長い間座っている方を急に立たせたりしてはいけなと、実践を通じて学んだ。」や、「高齢者は思ったより喜怒哀楽があった。」のように、高齢者の身体・精神面の特徴理解に対する内容が含まれていた。

《高齢者の生きがいづくり》の中には、「このような活動が、高齢者にとって生きがいのひとつに繋がると感じた。」のように、活動を通じた生きがいづくりの重要性を学んだ記載内容があった。

《社会性の維持》では、「活動を通じて、学生や施設スタッフ、他の入居者との交流が、高齢者の社会性を維持していくことに繋がると分かった。」のように、高齢者の社会性を維持するための活動の意義に関する記述がみられた。

【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】では、《高齢者の時代背景の理解》、《高齢者の人生観・価値観の理解》の2つのサブカテゴリーから構成された。

《高齢者の時代背景の理解》では、「高齢者とのふれ合いを通じて、昔の曲や当時のはやったものについて知ることができ、現代との違いについて学ぶことができた。」のように、高齢者との会話の中から、学生の知らない昔の流行りや生活について知る機会となったという内容が含まれていた。

《高齢者の人生観・価値観の理解》には、「高齢者の方はそれぞれ長い間生きてきた人生があり、価値観があることを学んだ」のように、高齢者それぞれの生きた人生、価値観にふれた内容であった。

表3 チャレンジサイト活動を通じた高齢者に対するイメージの変化と、学びの内容

高 齢 者 に 対 す る イ メ ー ジ の 変 化	カテゴリー	サブカテゴリ	コード
高 齢 者 に 対 す る イ メ ー ジ の 変 化	社会外向性の発見 (5)	積極性への驚き(2)	高齢者は積極的で驚いた(1)
			レクリエーションや、お菓子作りを高齢者と行い高齢者の本気で取り組む姿勢に驚いた(1)
		社交性の発見(3)	意外とお話し好きな高齢者が多いと思った(1)
			こちらから話しかけると気さくに喋ってくれた(1)
			年齢差があり何をお話してよいか戸惑ったが、料理や住まいの話など、あまり意識せずに普通の会話をすれば普通に話せると思った(1)
	朗らかさの発見(7)	明るいイメージへの変化(4)	活動に参加して高齢者は明るいイメージに変わった(4)
		温かさへの感動(2)	高齢者から笑顔で「ありがとう」と言われ、感謝の気持ちを大切にしていると感じた(1)
			自分のことを覚えてくれていて、より一層親近感が湧いた(1)
活 動 を 通 じ て 学 ん だ 内 容	高齢者への接し方・ 対応・援助への理解 (13)	コミュニケーション技術の重要性(9)	目線や話すスピードへの配慮(3)
			難聴の高齢者とのコミュニケーションの配慮(2)
			自己のコミュニケーションスキル向上を高めなければならないと感じた(1)
			挨拶の大切を実感した(1)
			同時に複数の高齢者と会話することの難しさを感じた(1)
			昔の話をすると、会話が弾んだ(1)
		高齢者の心身の特徴理解(2)	長時間の坐位姿勢からの起立性低血圧への注意(1)
			高齢者の意外な喜怒哀楽の発見(1)
		高齢者の生きがいづくり(1)	活動が高齢者にとっての生きがいづくりに繋がると感じた(1)
		社会性の維持(1)	学生、施設スタッフ、利用者間の交流の大切さを学んだ(1)
	高齢者の生きてきた 歴史・人生・価値観 の理解(4)	高齢者の時代背景の理解(3)	昔流行したものやライフスタイルについて知ることができ、現代との違いを学んだ(3)
		高齢者の人生観・価値観の理解(1)	高齢者の方はそれぞれ長い間生きてきた人生があり、価値観があることを学んだ(1)

7.考察

1) チャレンジサイト活動前後のエイジズムの変化

FSA 短縮版を用いてチャレンジサイト活動前後で学生のエイジズムを比較した結果、嫌悪・差別因子、回避因子には有意差がみられなかった。

嫌悪・差別について原田らは、「高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない」や「高齢者はだれにもめんどろをかけない場所に住むのがいちばん」といった高齢者の隔離・排除を支持する項目を含み、もっとも極端なエイジズムの感情成分を示す概念として位置づけられると述べている。また、回避について、「高齢者とは長い時間をすごしたくない」、「自分は老人クラブの行事には行きたくない」、「できれば高齢者と一緒に

住みたくない」といったできるだけ高齢者との交流を避けて距離をとりたいという感情成分を示す概念としている⁸⁾。超高齢社会が進行する我が国において、病院などの医療施設での高齢者の利用率が高くなり、施設における看護職の活躍が期待される中、看護学生の高齢者への嫌悪・差別、回避感情を低減していくことは重要である。

一般成人男性を対象とし、FSA 短縮版を用いた原田ら⁹⁾の嫌悪・差別(平均得点±SD)10.2±3.6、回避13.2±3.7と比較して、本対象集団のエイジズムはいずれも低値を示した。対象人数、背景が異なるため本研究の対象集団が一概にエイジズムが弱い傾向にある集団とは言い難いが、高齢者を対象としたボランティア経験率の高さ、本活動

への参加意欲から、高齢者への嫌悪・差別、回避感情はもともと低く、本活動への参加による影響はみられなかったと考えられる。

誹謗は、「高齢者は過去に生きている」「高齢者はけちでお金や物を貯めている」といった否定的な認知成分を示す概念として位置づけられている⁸⁾。今回の調査では、チャレンジサイト活動後に誹謗因子得点が有意に低値を示した。活動を通じて高齢者と関わる中で、手紙でのやり取りや、会話の中から高齢者の生きてきた人生や価値観にふれ、高齢者を誹謗するような否定的な認知を弱める可能性が考えられた。

本活動の高齢者とのふれあう交流は、看護学生にとって高齢者とのコミュニケーションの機会であり、高齢者をケアするうえで貴重な体験となる。祖父母と同居している割合が少ない現代の学生にとって、高齢者との交流機会を持つことは、高齢者を理解する学習の機会につながり、エイジズムの一部を弱める効果も考えられたため、看護学生の高齢者との交流活動を支援・推奨していく取り組みが重要と考える。

2) チャレンジ活動を通じた高齢者へのイメージの変化

学生は、活動を通じて高齢者の【社会外向性の発見】、【朗らかさの発見】といったポジティブなイメージを感じており、ネガティブなイメージを示すような記述はみられなかった。

施設での交流活動では、比較的健康で元気な高齢者と接する機会が多かったため、高齢者の活動性や積極性といったプラスイメージを高齢者に持つことができた¹⁰⁾と考えられる。

老年看護学の授業で、高齢者のエンパワメントやストレングスといった強みを活かした自立支援について講義するが、実際に高齢者との交流活動を通して、高齢者の《積極性への驚き》や《社交性の発見》といった外交的な面を知り、《明るいイメージへの変化》や《温かさへの感動》のような高齢者の朗らかな一面にふれることで、高

齢者の強みを肌で感じ、エイジズムの低下につながる側面への効果も示唆された。

我が国の社会構造の変化により、高齢者人口は増加を続けており、高齢者に対する看護師の果たす役割も増加している。高齢者への看護の質は、看護者が持つ高齢者イメージの影響をうける¹¹⁾といわれており、本活動のように健康な高齢者と接する機会を作っていくことも重要と考える¹⁰⁾。

3) チャレンジサイト活動を通じた学生の学び

学生の活動を通じ学んだ内容として【高齢者への接し方・対応・援助への理解】が最も多かった。この要因として、高齢者との交流経験の少ない学生が多く、高齢者とのコミュニケーションに不慣れな者も少なくないためと考える。また、活動で接する高齢者の中には、難聴や言語障害や認知機能障害などが原因でスムーズに意思の疎通を図ることが困難な場合もあり、そのような加齢や疾病に伴う障害のある高齢者に対応するため、学生はコミュニケーションに対して困難を感じながらも、コミュニケーション技術の重要性を改めて感じていたと推察される。

【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】から、複数の高齢者と会話する中で、高齢者の過ごしてきた時代背景やライフスタイルについて知り、さらに高齢者の人生観、価値観にふれる貴重な機会となっていたことが推察された。

一般的に高齢者の話や生活体験を聞き、交流する体験が高齢者理解には重要と考えられるが、核家族化の加速を背景に日常生活において高齢者と触れ合う機会は極めて少なく、具体的で多角的な高齢者理解が難しいといわれている^{12) 13)}。また、核家族化や都市化といった社会構造の変化は家族構造や機能にも影響し、若者の高齢者と接する機会を減少させ、高齢者に対する偏見や差別の構造に影響を及ぼしていると指摘されている¹⁴⁾。

高齢者との交流活動の結果から、【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】に繋がった学習成果が見出されたことから、高齢者を全人的に理解するための一助となったと考える。

8. 結論

- 1) チャレンジサイトによる高齢者との交流活動前後のエイジズムの変化は、FSA 短縮版 3 因子のうち、チャレンジサイ活動後に誹謗因子が有意に低くなった。活動を通じて高齢者と関わる中で、会話の中から高齢者の生きてきた人生や価値観にふれ、高齢者を誹謗するような否定的な認知を弱める可能性が考えられた。
- 2) チャレンジサイトによる高齢者との交流活動による学生の高齢者のイメージの変化は、【社会外向性の発見】、【朗らかさの発見】がみられた。
- 3) チャレンジサイト活動による学生の学びでは、【高齢者への接し方・対応・援助への理解】、【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】が抽出された。

9. 研究の限界と今後の課題

本研究は、質問紙の回収率が 5 割未満であり、対象学生全体を代表する結果とは言えないと考える。また、より対象人数を増やし、今後検討していくことが課題である。さらに、対象集団には 1 年から 3 年までの学生が混在しており、研究期間中に講義や演習、実習を経てエイジズムに影響を及ぼした可能性があり、対象の選定も今後の課題である。

謝辞

本研究に協力いただいたチャレンジサイト活動に参加された中部大学保健看護学科学生の皆様に、深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 内閣府 (2015) : 高齢者白書 (平成 26 年版)、日経印刷株式会社、東京
- 2) 高崎絹子他 (1995) : 老人看護の理念と教育の展開、Quality Nursing、1(7)、17-33

- 3) 大谷英子他 (1995) : 老人イメージと形成要因に関する調査研究、日本看護研究学会雑誌、18 (4)、25-37
- 4) Butler RN (1969) : Age-ism ; Another form of bigotry、The Gerontologist、9、243-246
- 5) 石倉花奈子他 (2011) : 看護学生の高齢者イメージとエイジズムに関する横断的調査、インターナショナル Nursing Care Research、10 (3)、119-127
- 6) 高野真由美他 (2008) : 看護学生の背景による老人イメージ、知識、エイジズムの相違 FAQ、FSA、SD 法を用いての分析、日本看護学会論文集:、看護教育、38、147-149
- 7) 佐野望他 (2010) : 看護学生の高齢者の知識の理解と看護の学びによるエイジズムの関連ー高齢者看護学実習Ⅰの学習効果ー、共立女子短期大学看護学科紀要第5号、7-16
- 8) 原田謙他 (2004) : 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成 ; 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定、老年社会科学 26 (3)、308-319
- 9) 原田謙他 (2008) : 都市部の若年男性におけるエイジズムに関する要因、老年社会科学、29 (4)、485-492
- 10) 大石和子他 (2005) : 高齢者のプラスイメージを形成する老年看護学臨地実習の検討、日看護学会論文集 看護教育、35、94-96
- 11) 大谷英子他 (1995) : 老人イメージと形成要因に関する調査研究、日本看護研究学会雑誌、18 (4)、25-37
- 12) 木下香織他 (2006) : 2 年次老年看護学実習における学生の学びと指導上の課題ー実習のまとめのグループワークからー、新見公立短期大学紀要、27、67-77
- 13) 藤野あゆみ他 (2009) : 高齢者疑似体験前後における学生の共感性の変化、日本看護福祉学会誌、14(2)、135-147

森 幸弘、福田峰子、松田武美

- 14) 杉井潤子 (2007)、なぜ高齢者を差別し虐待する
のか、老年社会学、28 (4)、545-551

Title: Change of the Ageism and Image of elderly
person among Nursing Students at University
- From Contact activity with elderly person
by the challenge site activity

Author(s): Yukihiro Mori, Mineko Fukuta,
Takemi Matuda

Address: Department of Biomedical Sciences,
College of Life and Health Sciences, Chubu
University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai,
Aichi, 487-8501, Japan

Keywords: Nursing Students at University,
Ageism, Image of elderly person, Contact
activity with elderly person